

2026年度神戸大学文学部公開講座「温故知新の人文学」

< 講義概要 >

9月19日（土）13：40～15：10 教授 古市 晃（専門：日本史学）

作られた歴史から史実を読む——古事記・日本書紀からみた古代国家

『古事記』『日本書紀』は、現存する日本最古の歴史書で、そこには天地創成から神々の世界、天皇による統治の物語が記されています。ただそこには多くの作られた物語が含まれることから、史実を読み取るのは難しいとされています。この講義では、『古事記』『日本書紀』からいくつかのトピックを選び、物語が作られてゆく過程を明らかにしつつ、その古層にどのような史実があるのか（またはないのか）を考えてゆきます。また考古学の調査成果などにも触れつつ、古墳時代中頃から終わり頃（5～6世紀）の日本列島でどのような国作りが行われていたのかについても考えます。

9月19日（土）15：20～16：50 教授 茶谷 直人（専門：西洋哲学）

謎の人ソクラテス——かれは誰となにをどのように「対話」したのか

古代ギリシアの哲学者ソクラテスは、職業として教育研究に従事したわけでも高名な政治家だったわけでもありません。おまけに一冊の書物も著していません。かれはただ、アテネの一市民として、広場や運動場や友人の邸宅など様々な場所で様々な人々と日々「対話」を繰り返しただけです。それなのになのになぜかれは、西洋哲学史上最も重要な哲学者の一人として位置づけられているのでしょうか。かれはなにを、誰と、どのように「対話」したのでしょうか。なぜかれはアテネの人々に告訴され死刑にまでなってしまったのでしょうか。こうした疑問を解き明かす取り組みの一環として、今回はソクラテスの最大の論敵である、弁論の術を駆使し当時一世を風靡していた「ソフィスト」と呼ばれる人々との対話——それは「対話」という言葉からイメージされるような和気藹々としたものではなく喧嘩同然の言い争いですが——に焦点をあててお話ししてみたいと思います。

10月3日（土）13：30～15：00	准教授 早川 太基（専門：中国文学）
孔子の奏でた音楽——聴覚で味わう「温故知新」	
「温故知新」とは、東洋の道德の根幹をなしてきた『論語』に収められる孔子の言葉です。昔の人の言葉や生きかたを学ぶことは、今の人にとっても大きな指針であるという意味であり、同時に人間やその社会の本質は、昔も今も変わらないという実態をも照らし出します。 今回の講座では、「温故知新」を含めた孔子の教えについての解説を主軸に据えながら、同時に孔子の愛した「楽＝音楽」について理解を深めてゆきましょう。「楽」は調和の象徴であり、儒家思想では「礼楽思想」として重要視されました。 開講時には実際に、孔子が好んで奏でたという楽器「七絃琴」を持参し、孔子が作曲あるいは演奏したと伝わる3つの曲を、講師による生演奏によってお届けいたします。①若き日の孔子が、有名音楽家である師襄子から習ったときに見事に「作者は周の文王の他には考えられません」と言いつけてたと伝わる「文王操」。②谷間に人知れずに開いた蘭の花はやがては散ってしまうことから、世人に理解されずに埋もれゆく己の人生を重ねあわせて作曲された「幽蘭」。③太平の世に現れるという聖獣の麒麟が、乱世に出現したために害に遭ったことを哀しんだ気持ちから創作された「獲麟」。 このような七絃琴の名曲に耳を澄ませながら、孔子の生きた2500年前に遊ぶ旅に出かけ、その思想や生きかたについて学んでゆきましょう。	
10月3日（土）15：10～16：40	准教授 田中 智子（専門：国文学）
源氏物語の魅力——紫のゆかりの物語	
『源氏物語』は千年もの長きにわたって、実に多くの人々に読まれ続けてきました。その魅力の源泉は、多様な読み方を受け入れる、物語としての懐の広さにあるのでしょうか。本講座では、「紫のゆかり」の語を手がかりに『源氏物語』と向き合ってみたいと思います。 『源氏物語』は、光源氏の父桐壺帝と母桐壺更衣の悲恋の物語から始まります。母更衣の死後、光源氏は、亡き母に瓜二つだという継母の藤壺宮をひそかに慕い、正妻の葵上を得てもなお、藤壺への慕情を抱き続けるのでした。ある時光源氏は、北山の地で、藤壺に瓜二つの少女、紫上（藤壺の姪）を見出し、自邸に引き取ります。その後葵上が亡くなると、紫上は光源氏と結婚し、彼の女癖に悩まされつつも、自他共に認める光源氏最愛の妻としての地位を確立していきます。しかし物語終盤、光源氏が、朱雀院の娘でしかも藤壺の姪にあたる女三宮と結婚すると、紫上の立場は大きく揺らぐこととなるのです。 この「（桐壺更衣→）藤壺→紫上」と連なる血縁のつながりは古来「紫のゆかり」と称されてきました（「紫」は紫草、「ゆかり」は縁者の意）。「紫のゆかり」（藤壺の姪）であることが契機となって光源氏に見出された紫上ですが、女三宮という新たな「紫のゆかり」の出現によって、紫上の生は根底から揺さぶられていくのです。 本講座では、『源氏物語』正篇のストーリーのキーワードというべき「紫のゆかり」の語に注目し、原文を味わいながら物語を読み解いてみたいと思います。	